OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	癌と死
Author(s)	太田, 和雄
Citation	癌と人. 1991, 18, p. 6-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23975
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

癌　と　死

太　田　和　雄*

まえがき

癌細胞は分裂，増殖，成熟，死という正常細胞の秩序からはずれ，勝手に増殖し，身体のいろいろな所に転移し，ひろがり，生命を保つ上に重要な機能を犯すことによって人を死に至らしめる。しかし癌の中でも比較的おとなしい癌もあって，転移もせず一か所でゆっくり増殖して大きなかたまりを作り，長い経過をとるものから，急速に増殖し，また転移し，非常に短期間の間に死に至らしめるものまでいろいろある。本稿では癌と死に関していろいろな観点に立って私見を述べてみたい。

癌治療の進歩

従来より癌は死病として恐れられてきた。これは今日でも癌を放置しておけば必ず死に至ることには変りはない。しかし現在では癌の治療はずいぶん進歩してきて，よく治るようになった。この癌の治療の進歩は手術，放射線，抗癌剤などの治療法それぞれの進歩のお蔭であることも確かであるが，その貢献には早期癌発見の診断技術の進歩による方が大きいと思われる。

では従来，癌の早期発見はどの位進むかという見通しであるが，近年の分子生物学の進歩によってある種の癌，例えば特殊な白血病などではDNA診断といって極めて微量な癌細胞の存在も，診断可能となってきている。現在ではそれによって再発の早期発見，早期治療に応用されている。しかし癌は身体中のどこの臓器に発癌してくるか分からない点を考えると，それらを如何にして探索するかまだ越えねばならないハードルは山程あるが，近年の科学の驚異的な進歩は，人間の予想をはるかに越えて進歩するであろう所から，それは近い将来に達成されることを期待したい。

癌の告知

しかし一方，なお多くの癌において，その癌の特性，ならびに診断時期の遅れから治癒困難な進行癌の多いことも事実である。この進行癌に関してはいろいろな問題がある。

マスコミにも昨年よく取りあげられた医療におけるインフォームド・コンセント（説明と同意）の問題である。これは端的にいうと医師は必ず患者に，病状についてよく説明し，これからどういう処置をするのかをよく分かるように話し，患者がこれを理解し，納得し，同意した上で検査をし，そして治療をしなければならないということである。これは医師と患者の信頼関係をよく保ち，質の高い医療を行う上に欠くことのできない基本的な治療行為である。ところが進行癌の治療の場合，これが非常に難しいことが応々にしてある。

それは，その出発点である癌の病名告知がわが国においてはそんなに簡単には行えないという事情があるからである。旧来の癌は原則として告知すべきではないとする考え方から，医師も，患者も，また患者の家族も癌の告知から逃避しようとする傾向があるからである。医師の最初の気休めの嘘から出発した不合理な説明，それが質の良い癌治療の障害，やがては患者の不信へと発展し，いろいろな不幸な結果の生ず

*愛知県がんセンター名誉総長，名古屋記念病院院長

ることにもなる。これは癌診療におけるインフォームド・コンセントの難しい所であり，医師も患者家族も共に悩む問題である。これは欧米人とは異なる日本人の死生観，人生観に基づくものであり，そう簡単には割り切れない点が多い。しかし科学的に正しい癌医療を行うためには積極的にインフォームド・コンセントを行うよう努力すべきであり，癌告知についていろいろな方法を考えながら前向きに対処して行かなければならないのではないかと思う。

癌の免疫

癌と死を考えるとき，動物実験では唯一個の癌細胞の移殖によっても動物を死亡させることができる。しかし人間の場合ではそうはいかない。手術で癌を明らかに取り残した場合でも不思議の再発しない例がある。全身転移の場合どこにも癌が再発しても良いのに，ある臓器には再発してこない。それはその臓器では癌は育たないからである。また癌細胞は何年も生きながら眠っていて，ある時突然目を覚ますかのように10年20年もたって再発してくる場合がある。それらの理由はまだ明らかにされていないけれども，大まかに言って免疫の作用と考えられている。

そういうことから15年位前から癌の免疫療法という第4番目の治療法の研究が始まった。抗癌剤による癌の化学療法の歴史が約50年であるので，免疫療法はまだ非常に新しい治療法で未完成であり，その力はまだ弱いものである。インターフェロンが夢の抗癌剤といわれたのもその一つであるが，近年のバイオテクノロジーの驚異的な進歩から考えて，癌の免疫療法を含めた癌の生物学的治療法は将来すばらしい発展を示すであろうし，夢の治療法と期待したい。癌と立ち向かって積極的に戦おうとする人の方が延命するという科学的なデータがあるように，癌に対する免疫力と精神力とには深い関係があるということを重視したい。よって進行癌の治療の場合も希望を持つということは極めて重要であり告知を行う上にも大切なことである。

死への準備教育

癌と死を考える時，我々は人間の死ということについて常日頃から考えておかねばならないと思う。癌の告知のことでよくお話しになる，上智大学のデーケン先生は死への準備教育の重要性について強調されているが，今日の日本は余りにも平和であり，福祉が行き届いていて，人の死を身近に見，それについて深く考える機会が余りにも少なくなってきている。生身の身体である人間は何時かは死を迎えなければならない。それまでの生命の続く限り価値のある生き方をし，悔いの残らない有意義な人生を送ることが大切である。不幸にして癌になった場合，最良の治療を進んで受け，それにも尚，不治の場合は残りの生命を大切にして死を受け入れるよう心の準備をしておくことが大切である。

癌の予防

癌の予防については他にも多くの記載があることであり，癌にならないための第一次予防と，癌で死なないための第二次予防とあることは皆よく承知のことと思う。特に第一次予防について考えると，確かに過去のデータから疫学的に調査した結果，その原因ならびにその因果関係は理論的には正しいけれども，これを実践することは極めて困難な場合がある。例えば乳癌の増加は明らかに日本女性の生活スタイルの欧米化による事は確かであろう。さりとてこれを予防するために現代の日本女性に向って，古い時代の多産にして貧しい栄養の生活スタイルに戻れと言ってもそれは不可能なことである。日本人の食生活の変化によって胃癌は減ったが，遂に大腸癌が増えたという結果になった。第一次予防の中で禁煙を奨めることは大賛成であるが，癌という病気の性質上，むしろ第二次予防に期待したい。と言ってもこれで充分可能というわ

けにも行かない。自ら限界があることを知るべきであろう。それは早期発見可能な癌，そしてその時期に治療すれば治癒可能な癌に限っていえることである。それが通用しない癌の種類は沢山ある。しかしその頻度は少ないことが幸であり，そのような癌になることは運が悪いとあきらめるより仕方がない。早期発見，早期治療の可能な癌でありながら，早期発見が遅れ，診断された時には進行癌で，治療が不成功に終り，死ななければならないのは自らも残念なことであり，残された家族に対して申し訳ない。

癌の権威で，本人やその家族が，その専門の癌で亡くなった話をよく聞き，一体どうしていたのかと疑いたくなることがある。また医者の不養生というか，専門バカというか，ひょっとして癌と診断されるのが怖いからといって，なかなか癌の健診を受けない医者のいることにはあきれる。また外来でそんなことを言う患者さんに対して，そんな恐ろしいことをよくやっておられますね。車検も受けず，また保険も掛けずに自動車を運転しているようなものですよ，といってあげる。

子宮癌や胃癌が非常によく治るようになったのは癌の健診が普及したお蔭である。子宮癌や胃癌は今ではもはや死ぬ病気ではないと言っても過言ではない。それで死ぬようなことは恥ずかしいことと思わねばならないといっている。胃癌は早期癌でとどまっている期間が何年と非常に長い。だから定期健診を受けていれば早期胃癌のうちに発見できて，それは手術によって治るのである。もう少し進んだ中期胃癌でも，周囲のリンパ節に転移があっても胃癌ではかなりよく治る。この辺りは胃癌の特性であり，胃癌の外科治療の進歩と言える。しかし癌の種類によってはそうはいかない癌も多い。今日の癌治療の限界をわきまえて，人事を尽して天命を待つのである。

癌とQOL

クオリティ・オブ・ライフ（QOL）「生命・生活の質」ということも癌治療において重要となってきた。如何に後遺症を少なくするか，外科治療手技の改良が研究され進歩してきているし，抗癌剤の副作用を如何にすくなくするか研究されている。最近抗癌剤による悪心・嘔吐を止める非常に良い薬が開発されてきている。癌とQOLで特に大切なのは末期癌に対する疼痛のコントロールである。人が癌を恐れる理由の一つとして末期癌の苦しみ，堪え難い痛みがある。しかし最近ではモルヒネ剤を充分に使ってこの痛みはよくコントロールできるようになった。残された短かい終末期を安楽に過ごすにはこの痛みのコントロールは必須である。痛みがなく家族に見守られながら眠るように死んで行けるようにするのが終末期癌の大切な治療である。

Yucca gloriosa.
（ユッカ＝ゆり科）